

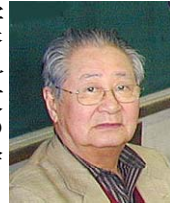
旭川文学資料友の会 友の会通信

第1号

旭川文学資料友の会
旭川常磐公園内
tel 22-3310(228)

「旭川文学資料友の会」の発足

会長 相川 正志



二〇〇一年三月発足した「旭川文学資料研究会」は創立五年を迎えた今年、より充実した活動を期し、新たに名称を変え「文学資料友の会」として今年四月発足した。

「文学資料友の会」は前身の「文学資料研究会」同様、ボランティアによる地域の文学資料収集とその整理、希望者には情報提供、分析、そして文学資料展の開催などを目的とし、近い将来旭川に文学館設立を期待して創設された。

「文学資料研究会」は、発足以来四年間で市民から寄せられた資料は約三万点余にのぼり、既に三万点のコンピュータ入力を終えている。そして、その成果は『あさひかわ文学資料調査報告』として毎年発行している。また、文学展も今年で九回を数えるに至り、六月二十四日から井上靖記念館で、板東三百展を実施した。

このような実績の継承を基により充実した活動、すなわちコンピュータによる全国ネット化、市民に対する啓蒙活動、講演会など、将来の市民運動までも盛り上げ、未来に向かって確実な歩みを築くべく文学資料友の会と改称活動の充実を目的とする。

近年、核家族化、世代交代が進み多くの郷土の

作家の貴重な資料が散逸の危機にある。今、資料を収集整理、調査研究を行わなければこれらの資料は散逸し二度と収集が困難な時代になった。

この「文学資料友の会」は、文化の灯を後世に伝える重要な役割を持つ文化活動である。

ご多分に漏れず旭川市も財政危機のただ中であり、財政的援助は期待できない。会の自立、そして互いの協調、協働が会の永続には必須である。

そのためにはより一層多くの市民の理解協力とボランティア、協力会員の充実とNPOなどの設立による基盤の充実が肝要と考える。

急がずに、休まずに、確実な歩みを続け近い将来に充実した市民による市民のための文学館設立を祈念し稿を終えます。

文学資料データ入力状況 ※平成18年3月31日現在

■室蘭・港の文学館から寄贈をうけた608点の板東三百資料は整理つき次第これに加わる。(提出杏澤)

データ入力件数	1一般図書	2雑誌ほか	3その他	4写真資料	合計
A旭川関連資料	4,871	10,573	1,815	94	17,353
・小黒秀雄関係	117	204	67	16	404
・小黒秀雄賞	648	924	316	-	1,888
・今野大力	40	79	291	2	412
・安部公房	66	73	6	1	146
・板東三百	10	5	5	-	20
・井上 靖	186	19	3	3	211
・三浦綾子	792	116	57	2	967
・佐藤喜一	42	164	29	4	239
・高野斗志美	16	60	3	-	79
・木野 工	12	9	7	-	28
・鈴木政輝	27	35	-	2	64
・下村保太郎	49	40	48	4	141
・宮之内一平	53	281	25	1	360
・第七師団	23	5	-	-	28
・アイヌ資料	85	2	-	-	87
・その他旭川	2,705	8,557	958	59	12,279
B道内関連資料	2,814	368	142	118	3,442
C道外関連資料	9,336	352	307	-	3,442
合計	17,021	11,293	2,264	212	30,790

旭川文学資料研究会を改称 「旭川文学資料友の会」総会を開催

平成十八年四月二十二日(土)午後一時半から、旭川市民文化会館の二階大会議室において平成十八年度定期総会が開催された。現在会員、百八十七名の中、出席者四十五名、委任状九十名で合計百三十五名をもって総会の成立をみた。

過年度の物故者、新明紫明殿、佐竹昭夫殿に黙祷を捧げて議題協議に入った。

主な議題として、本年度事業では六月の「板東三百展」の開催、友の会会員拡大と引き続き資料の収集と整理・保存の推進等を審議確認をした。

これまでにデータ入力された資料件数は、三万七九〇件で、これに室蘭文学館から寄贈された板東三百の資料などが整理され次第これに加わる。

《組織改編》以下氏名敬称略

組織改正に伴い、顧問に井内治弥、中山円融、大野信夫、東郷明子、菅沼和歌子の各氏が選任され。副会長には白井恵理子氏が、会計監査に氏家正実、西川良子の両氏が。新任事務局長は菅野浩氏、同事務局に森内伝、金巻鎮雄、水 downstream、坂井京子の各氏。新設の「会計財政部会」は十河宣洋、東延江、神戸紀美子の三氏。「資料整理部会」佐藤比左良氏等八名、「資料収集部会」は石山宗晏氏等二十名の配属が発表され、大幅な改正をみた。今期新設となった「広報・展示部会」は沢栗修二以下十二名。対外PRとあわせ、対内広報として『友の会通信』を年二回の発行。まず最初の仕事は、「板東三百」の展示会と創刊号となる『友の会通信』の発行である。早速、各部長から自己紹介をかねての寄稿をおおいだ。

「い」あごわい」

事務局長 菅野 浩

平成十八年四月二十二日の総会で、名称変更した「旭川文学資料友の会」の東事務局長のあとを継ぐことになりました。

もとより力不足ではありますが、「文学資料友の会」の円滑な運営と文学資料の収集整理に努力して参りたいと考えております。よろしく御指導、御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

「旭川文学資料友の会」がこれまでの五年間で収集整理した資料は三万点を越え、旭川市教育委員会が旧青少年科学館に設置した「旭川文学資料調査室」に保管され、ご希望があれば閲覧も可能です。どうぞ足をお運び下さい、歓迎いたします。また、貴重な資料も多数保存しています。

文学資料展も、平成十三年七月の第一回展から、平成十八年六〜七月の「屯田作家 板東三百」展まで九回を数え、好評をいただいております。

「旭川文学資料友の会」の活動は順調に進んでいますが、まだまだ会員数も、資料整理ボランティアも不十分です。どうぞ新会員の勧誘と、毎週水曜日に行っている収集資料整理ボランティア作業への参加にご協力をお願い致します。どうぞご支援下さい。

「参加のきっかけ」

資料整理部会 佐藤 比左良

一番地味でも友の会の最前線は、ぼくらの「資料整理」でしょうか。

有志から寄贈された図書や雑誌、チラシ、新聞切抜き、すべてカードに書込み、データベース化する作業です。はじめ、啓明小学校の空教室を借りていましたが、昨年十月、旧青少年科学館の地下に移り

ました。

現在は毎週水曜日、十二、三人でもくもくと励んでいます。

皆さん短歌、俳句、詩など、それぞれの分野で活躍されている方々なので、作業も捗り、書込みは二万を超えました。しかし、まだまだ手つかずのダンボールが、山積みされており、作業は果てることなく続きます。また、パソコンへの打込みや、種々雑多なこと実質的に部屋を仕切っているのは、細かい力持ちの若い沓澤さん（市囀託）です。

なんととっても楽しみはお昼です。女性の方々が持ち寄った手料理などが、一人一人の大皿にあふれるほど盛られ、食後はデザートにコーヒ。食べきれなくて持ち帰ることもあり、いつも恐縮していただいています。

ぼく自身の友の会への参加は、小熊秀雄と今野大力の名を冠した「文学館」が欲しいと思っていたのがきっかけで、仲間に加えていただいたのですが、こうした形になるのであれば、もっと分野がひろがり、たとえば旭川出身の漫画家、村本輝夫、いがらしゆみこ、佐々木倫子などの作品や資料も集まるといいと思っています。

最後に自己紹介、詩とのかかわりは、昭和二十二年通信講習所時代に同級生の柚木衆三（故人増毛出身）らと文芸誌をつくったのが始まりです。旭川郵便局配属後、労働運動の波にもまれ、当局に睨まれました。今野大力について知ったのもその頃。七十六歳、最近老化著しくピンチです。

「資料収集の◎と♡」

資料収集部会 石山 宗晏

二〇名の部員の◎に♡指名いただきましたが、生来の

怠け者は大変とまどっております。幸いそうそうたるスタッフを擁しておりますので、みなさんとよく相談をしながら仕事を進めていきたいものと考えております。

すでに質実ともに膨大な資料がジャンルごとに整理され、目録も精力的に整備されつつあると伺っております。そのような中で私たちができることはどんなことなのでしょう。

さしあたってこんなごく当たり前の仕事の手順を思い浮かべておりますので、皆さんそれぞれ多忙でしようから、いつかお会いする時の共通の話題となるようにご検討いただければ幸いです。

第一に現在の目録を各ジャンルごとに目を通していただいて、これ以上どんな資料が必要なのか、要るのか要らないのかの厳選の作業があるように思います。

次に要るはずのものがなければ収集意欲をかきたてなければいけません。さてそれを入手するにはどうするか。その資料的価値のある文献、原稿などの所在を探らなくてはなりません。要は収集するための情報を得ることが肝要になります。

二〇名の部員は、それぞれのジャンルの具眼の士でありますので、この第一、第二の作業は十分可能なことであろうと信じます。

かくして分業の作業は、総合へと向かわねばなりません。拙速を戒めながら着実に進めたいと存じますが、何分にも非力な◎です。どうかみなさんお力をお貸し下さい。

自己紹介を忘れました。

一九三九年生まれ。中学校国語科非常勤講師。短歌結社「かぎろひ」代表。一線美術会北海道支部長。

趣味は家庭料理、旬の食材を得て、酒菜をこしらえて日本酒をゆつくり楽しむこと。

「文学の湧出る街を」

会計財政部会 十河 宣洋

旭川の街を歩いていると、ブロンズの彫刻があちこちに見つかる。また、春にはこの彫刻を中学生が掃除しているのを見かけることがある。旭川の風景にこれらの彫刻が溶け込んでいるのがとてもいい気分である。

昨年、埼玉の熊谷市の街を歩いていると、ここでもブロンズの彫刻にぶつかった。なにげなく、解説を読んでいると中原悌二郎賞受賞作家とある。旭川から発信された彫刻の受賞者と思うと、この桜井祐一という作家に会ったこともないのに急に親近感を持つたりして、あらためてこの「レダ」と題された彫刻を眺めなおしその力強さと色つばさを堪能したものである。

いま、旭川に縁のある文学の資料を収集整理している仕事にボランティアで関わっているが、その裾野の広さに驚いている。文学が古人の作業が生み出すものというイメージが強いが、文学を生み出す風土を考えたととき、文学はその土地に生活している人たちの共同作業だと思うように私の気持ちは変わってきた。

今年の甲子園で活躍している駒大苫小牧高の野球のようなチームワークが文学を含めて、芸術を生み出すと言って過言ではない。駒苦以上のチームワークと粘り強さが必要である。息の長い、それであまり目立たない地味な仕事だが今やらなきゃ将来臍を噛むことになると言いつけながら、周りの人達に付いていっている状態ではあるが、何か楽しいのである。

今後、この楽しさを倍加してくれる資料が見つかるのと更にボランティアにも力が入るのではなからうか。そして、旭川のどこを歩いても、文学縁の地があり、文学の匂いのする街であることを想像していきたい。文学の湧き出る街でありたいと考えるのである。

「どうか、「協力をお願いします」

広報展示部会 沢栗 修二

例えば、詩や俳句のひとつも詠じたり、創作の一文などを著したとかの実績のない者が果たして入会資格に値いするのだろうか。そんな自問自答を繰り返しつつこの会に参加させていただいております。生来の物珍しがり屋で、なんでも体験と好奇心のまま取り組んできたようでもありません。系統だった学術理論は身につけておりませんが、これまでの職業体験をもってお役に立てるならと思っております。会員の皆さんの協力を得ながら、この会報をはじめ、企画される展示会について任を果たしていきたいものと考えております。どうぞよろしく。

《調査室より》

沓澤 章俊

あさひかわ文学資料調査室に市の囑託として勤務している、沓澤と申します。通常は一人で、資料のデータ入力や整理作業をしています。やろうとおもえば終わりのない仕事なので、正直なところ、疲れることもあります。いろいろな資料に接することができるので、おもしろくもあります。

毎週水曜日には、資料整理のボランティアとして、十数名の会員の方々が来てくださるので、とても助かっています。お昼には、持ち寄りのおかずやおやつ等を食べながら、和気あいあいと歓談します。とても楽しいひとときです。

昨年十月、啓明小学校から、今いる旧青少年科学館の地階に引っ越ししました。啓明小では、休み時間に子供たちが来てくれて楽しかったです。中にはおもしろいことを言う子供もいて、「おじさん(おにいさんではない)、ここで寝泊まりしてるの?」とか、「ここに来ると、道に迷って公園でひとりたたずん

でいるときに、親が迎えに来てくれたようで、ほっとする」と、詩的なことを言う子がいたりしました。今いるところは、子供は来ませんが、友の会の方々や、館の職員、また旭川市民もときどき訪れてくれます。先日は、小熊秀雄の詩碑を訪ねてきた年配のご夫婦がいたので、調査室を案内しました。訊くと、佐賀の唐津市から来たということでした。

また調査室は、友の会理事会、小熊秀雄賞実行委員会、わらの会などの会合の場所ともなっています。創作活動に役立つ資料がそろっていると幸いです。で、なにかのついでには是非気軽にお越しください。

開室時間は十時から十七時まで(土曜は十六時まで)、日曜・月曜・祝祭日は休みです。

この仕事に就いてから約三年半余ですが、ここまで続けることができたのは、会員の方々の励ましと支えがあつてのことだと思っております。この場をかりて本当に感謝申し上げます。



パネルの準備に励む、沓澤さん

『兵村』を著した・板東三百の文学資料展、井上靖記念館で開催

旭川市出身の文学者・板東三百。屯田作家と呼ばれ芥川賞候補作品にもあがった「兵村」を著した板東三百の資料展が、六月二十四日から井上靖記念館で開催。共催は同記念館及び旭川市教育委員会。

旭川文学資料友の会による展示自主企画はこれ

で九回目になる。七月二十三日まで開催。六月二十一日から二十三日にかけて会場へ搬入陳列作業を終えた。展示総点数は四百二十点にのぼる。

開幕初日の午後一時から、「ドクトル・ジバゴ」をテーマに、講師・工藤正廣北大教授による文学講座もあつてホールは来館者で埋まった。翌二



旭川在住の遠戚・赤坂勝巳氏

十五日は日曜日とで早くからの賑わい、この日、室蘭在住の板東晃氏が父三百を偲ぶ展示会場に姿を見せた。また、本州からの旅で旭川に来て偶然にこの展示会を知り立ち寄ったという親戚の方々も観覧され懐かしんでいた。本展の観覧者は延べで九九二名を数えた。

来館された親族の方々に、東延江さんが感想文を依頼、ご本人の了解を得て掲載いたします。

父板東三百の展示会が旭川で

板東 晃（室蘭市）

旭川の三百展の会場で、十五年前に亡くなった親友の星丈雄さんを思い出していました。

彼は私より五歳年上でしたが、「ポケットむろらん」というタウン誌を十二年間もの間、編集発行し続け

てきて、もの静かな人でした。私はどちらかと云うと体育会系ですが、星さんとは何か気が合つて、よく一緒に飲みました。そして、この星さんとのつながりで室蘭文学館長の樋口さんと知り合い、今回、東延江さんともご縁ができました。

母はしょっちゅう父の代筆をさせられて、送り仮名が違うなどとよく怒られたそうです。会場でいろいろな資料を見ていて、息子の私が云うのも変ですが、母の父に対する愛情と几帳面な性格が相俟つてこんなものまで残っているんだナ…と感じました。

私は心の中で「お父ちゃん、お母ちゃんにちゃんとお礼を云つたかい？お母ちゃんのおかげでこうやってお父ちゃんの生きた証が残っているんだヨ」と語りかけていました。父も照れ笑いをしながら、母に「ありがとう」と云っていたかも知れません。

そして、沢山の資料を整理してまとめて下さった室蘭の樋口館長さん、ボランティアの皆さん、それを引きついで下さった旭川の東延江さんはじめメンバーのみなさんには父も母も心から感謝していることと思います。

どら息子（母は私のことをよくこう呼んでいました）の私からお礼申し上げます。

最後になりましたが、三百展会場まで会いに来て下さった従兄弟の赤坂雄一さんにも、お礼を申し上げます。

私は一人っ子で兄弟がいらないものですから、血のつながりの温かさみたいなものをじんわりと感じさせていただきました。

近いうちにまた旭川で皆様にお会いしたいと思っております。

鞍馬天狗に扮したり、歌を唄ってくれた

「叔父・板東三百の想ひ出を綴る」

——赤坂稔氏（82）の手紙から——

先日は御丁寧な御手紙有難うございます。早々御返事と想ひながら、あれこれ叔父板東三百のことを考えておりました。この度の遺作展には大へんな御骨折りをいただき有難うございます。叔父の歿後六十年の今日、なつかしい旭川で板東三百叔父の作品に陽の目をあててくれる催しが開かれること、身内として大へん光栄におもいます。



角帽姿の三百

私は、叔父との年齢差十八です。叔父が大学生の頃に角帽姿で、父保一の家（三百の生家Ⅱ永山四丁目）に遊びにきて母の縫物用の竹の三尺ものさしを腰に、ふろしきで覆面して鞍馬天狗の真似で立ち回りましたり、伊豆の大島の唄「波浮の港」をうたつてきかせてくれたり、ほんとうに優しく可愛がられたことを想ひ起こします。

現在、北海道に六家族、本州に四家族と叔父の十人の兄妹は夫々分散してゐます。旭川には直系三家族のみです。お申しこしの「三百」の名前の由来に関しても、又遺品に出品されてゐない様な新しい史料のほりおこしもなく、既に私の両親も他界してゐる現在、若い従兄弟達に話しても全く新事実も出てきませんので悪しからず御期待にそえません。ご了承下さい。（以下略）

平成十八年七月十四日

赤坂 稔

ビジター短信

■去る六月一〇日、観光客とみられるご夫妻が、常盤公園の小熊秀雄詩碑を訪ねて来られた。折良く居合わせた沓澤君が資料調査室に招じ入れ対応した。棚に置いてあった小熊秀雄生誕一〇〇年記念のカレンダーを差し上げたところ大層喜ばれて持ち帰られたという。
九州唐津市からの旅行客は、秋山哲郎様ご夫妻。この度、その秋山氏からお礼状が届いた。小熊秀雄のファンが今もこうして訪ねて来ることには嬉しいかぎりである。了解のもと掲載。

「九州から 小熊秀雄詩碑を訪ねて」

佐賀県唐津市 秋山哲郎（7月12日消印）

梅雨の終り頃は強い雨が降るのですが、台風3号は九州西方海上を北上して安堵するのにも束の間、台風4号が発生、夏近しです。

六月九日から約十日間ほどの北海道、九州から梅雨を連れて行ったようで、天気には恵まれませんでした。緑の滴りを満喫。熊笹を全道で見かけたものの、竹一本もないのは驚きでした。一〇日もあいにくの小雨、優佳良織り工芸館に寄った後、タクシーを拾い小熊秀雄詩碑へ。どうにか探し当て、傘をさしてのビデオ撮り、碑石に比べ遠慮がちの詩文。沓澤さんに声をかけられ地下室へ。旭川関係の文学資料の棚、棚の生誕百年カレンダーをいただき、改めて再訪を願いました。「空が暗ければ、星は光る」。九州の唐津でも、一五〇余の九条の会の星、光り続けること改めて誓いました。沓澤さんにはよろしくお伝え下さい。

「資料室を訪ねて」

■七月十三日（木）午前十一時、札幌から清水紀子さんが来旭。清水さんは故・但野静耕氏（本名・伝助、ホトトギス派「石狩」同人、旭川市四の十四で但野木型店を自営。平成元年逝去）の三女、昨年夏、旭川の生家を解体する際、父の所蔵する俳句関係資料を姉と共に提供された方である。お礼をかね報告したところ、資料調査室を訪ねて来られ、父の所蔵品の収められた陳列ケースを前にしての写真を送った（沢栗撮影）。このほど、資料調査室あてに感謝のEメールが届いた。

清水 紀子 noriko-s@kml.biglobe.ne.jp

先日は、お忙しい中、あさひかわ文学資料調査室を案内、見学させていただきまして、有り難うございました。

多くの方の、労力と、奉仕によりまして、父の遺品を整理、陳列していただきまして、非常に感謝しております。言葉で言い表せないほど、お世話になりました。まだまだ、整理することありますが、今後もよろしくおねがいいたします。父の所蔵品を前にしての写真、ありがとうございました。プリントして、姉にも送ります。



故但野静耕氏の三女・清水紀子さん

「旭川文学資料友の会」（旭川文学資料研究会を改称す）主催による旭川文学資料展

第8回旭川文学資料展／下村保太郎の世界
平成15年5月、旭川市中央図書館



第7回旭川文学資料展／旭川の短歌
平成14年5月、富貴堂ギャラリー

「兵村」の板東三百資料が故郷・旭川に

旭川市出身の作家、板東三百の資料六百八点が、六月二十四日から旭川市春光の井上靖記念館で公開される。昨年十二月、市民団体「旭川文学資料友の会」（相川正志会長）に寄贈されたもので、二十六日、市内常磐公園のあさひかわ文学資料調査室で報道関係者に公開された。

板東三百は一九〇六年（明治三十九年）、上川郡永山村（現旭川市永山）生まれ。三十九年に発表し芥川賞候補となった「兵村」は、永山を舞台に開拓農民の人生を通して、屯田兵村の解体や人々の悲しみを描いている。「兵村」など七編を収めた第一創作集「兵村」は有馬賞候補に選ばれた。四六

原稿など608点 6月24日から公開

室蘭の文学館が「友の会」に寄贈



寄贈された板東三百の資料。手前左は東北帝大の卒業論文

年、腸結核のため東京で四十歳で亡くなった。板東三百は室蘭で教鞭をとった縁などから、妻の故・一子さんが室蘭の文学館が保存、公開して

いた。直筆原稿や自らの体調を記した病状記録、名刺や家族写真など多岐にわたる。文学を志すきっかけとなった東北帝大の卒業論文「葛西善蔵研

究」など珍しいものも。一子さんは生前「三百の資料を生まれ故郷の旭川にかえってあげたい」と語っていたといい、「旭川文学資料友の会」の受け入れ態勢が整ったため寄贈を受け、これまで整理、分類していた。

同会は「三百は若くして亡くなっただけに資料も少なく、ずっと探していた。旭川の開拓の歴史を知る上でも貴重」と喜ぶ。三百の長男で室蘭市在住の晃さん（みづは）おやじを思い出すと文学館に行っていたので少し寂しいが、旭川に戻るのがいいと思う。一般公開されたら見に行きたい」と話していた。

「屯田作家 板東三百展」は七月二十三日まで。（水島久美）

北海道新聞平成十八年四月二十七日付朝刊に掲載。板東三百資料を紹介している。



写真上・平成18年6月21日午後から展示品を搬入し、準備作業とケース・パネルなどを配置。開幕前日23日に仕上げ作業を完了した。



写真下・平成18年6月24日からの展示に備え、パネルとキャプションの制作に取り組む展示広報部会。（渡辺真知子、土橋和子、高木五郎の皆さん）